

## “環境にやさしい”とは。

このごろ街には、“環境にやさしい”何とか……という広告があふれている。商品のレッテルに書いてあるものもある。

かねがね“環境にやさしい”というのはおかしい言葉だと筆者は思っている。夫婦ゲンカをしながら「オレはやさしい」「あたしはやさしい」と言い合っているようなものだと思う。どちらがやさしいか、両方ともやさしいか、両方ともやさしくないか……、これは第三者が判定しなければ結論はでない。同じことで、人間が「オレはやさしい、これはやさしい」と言い張っても、環境に答えを聞いてみなければ、やさしいかどうかはわからない筈だ。

ところで、地球環境問題には第三者がいない。不確定性・緊急性・不（非）可避性・複雑性など、地球環境問題には特徴が幾つかある。しかし、その最たる特徴は判定する第三者が居ないことである。行司の居ない相撲のようなもので、きわどい勝負ほど相撲をとっている者自身が勝負を判定することは不可能である。地球環境問題は人間と環境とのかかわり合いである。スポーツの勝負ではあるまい。

最近、ある大学の入学試験に「環境にやさしい」とはどういう意味か。最適と思われる項目三つを選び、その具体例を書け。という問題を筆者は出した。その項目とは以下のものである。

- (a) リサイクルが技術的に簡単である。
- (b) 余暇ができて緑化運動に参加する時間ができる。
- (c) 地下水を汚染しない。
- (d) 汚染物質をより遠く海に流してしまう。
- (e) 排気ガスの量が少ない。
- (f) 排気ガスの温度を下げる。
- (g) 自然生態系のサイクルを早める。
- (h) 光化学反応の速度を早める。
- (i) 大気中の二酸化炭素の濃度を下げる。
- (j) 地熱発電でエネルギーを得る。
- (k) 商品のイメージアップのための言葉で科学的には不明確である。
- (l) 地球温暖化したときに、夏の暑さから身体を守る衣服素材を開発する。

入試問題だから、当然間違っている項目も入っている。例えば(d)(f)(h)(l)などである。その他は多少とも関連があるから、どれを取りあげてもよいし、点の差はその具体例の書き方によってつく。最も興味のあることは、どの項目を取りあげたかの頻度分布である。ただし学会の発表の場ではなく、入学試験という場だから、点を間違いなくなるべく高くとると言う……言いかえれば、危ない橋は渡らずに正解をするというテクニックが裏にあることは考慮しなければなるまい。全体の27%が(e)を選び最高、次いで、(i)が21%、(j)が19%、(a)と(c)が15%ずつ、(b)(g)(k)がそれぞれ1%であった。

筆者は(k)が最も注目に値すると思う。回答者が皆無ではなく、極めて少数でもあったことにむしろ驚いた。そして具体例としては、一人は太陽電池、他の一人はコンビニの袋などの例を取りあげた。筆者は採点しながらこの受験生にバンザイを叫びたくなかったが、そこはグツとおさえた。

もうひとつ計らざる収穫だったのは、この(k)を選んだ受験生が(g)を選んだ場合が2例あった事実である。つまり、生態系としての地球環境が頭に入っている若者が居るという現実である。

“環境にやさしい”という言葉はおかしいのだ……科学的には判定し得ないことなのだ……ということに気づいている人間が1%とは極めてわずかと言うかもしれない。しかし、もし、この数字が一般人にもあてはまるとするならば、100万都市には何万人も、こういう人が居ることになる。大東京には10万人以上の人居ることになる。

行司のいない相撲やレフェリーのいないレスリングはすでにスポーツではなからう。ルールもなく、判定者もなしにもしとコトンやれば、片方が仮に先で他方に時間のおくれがあっても、両者とも再起不能か、死に至るであろう。